

令和元年度 新発田市遺跡出土品展

新発田の中世遺跡 —近年の発掘調査成果から—

令和2年2月28日（金）～3月25日（水） / イクネスしばた 展示室

主催：新発田市教育委員会

開催にあたって

近年、新潟県内では中世の遺跡の発掘調査事例が増加しています。これまで遺跡の存在が知られていなかったところからの発見も相次ぎ、様々な調査成果があげられています。新発田市内でも中世の遺跡は多く見られ、平野部から山地にかけて300か所以上が見つかっています。

今回の展示では、平成24年から27年の間に発掘調査を実施し、近年、報告書が刊行された中世遺跡の住吉遺跡（中島地内）、五十公野館跡（五十公野地内）、板山館跡（板山地内）について、その調査成果をご紹介します。

「武士が活躍した動乱の時代」とも言われる中世において、新発田の人々が残した足跡に思いを馳せる…。この度の展示が、皆様にとってそのような機会となることを願っております。



※ この図は、国土地理院発行の数値地図 25000(空間データ基盤)及び基盤地図情報を加工して作成しました。

すみよし 住吉遺跡

所在地：新発田市中島字住吉 108 番地 ほか
調査原因：県営ほ場整備事業 紫雲寺 2 期地区
調査期間：平成 24 年 10 月 3 日～12 月 25 日
平成 25 年 5 月 16 日～12 月 27 日
調査面積：3,126㎡



遺跡遠景(北西から)

○遺跡の概要

住吉遺跡は、かつての塩津潟（紫雲寺潟）の潟端にあたる微高地に立地します。遺跡がつくられた頃の周辺河川の多くは、潟湖に注ぎ込むか、砂丘列を伝って阿賀野川と合流し、日本海へと流れ込んでいました。当時の人々は、陸路とともにこれらの潟湖や河川を利用した水上交通で移動し、物資を流通させていたと考えられます。

○発掘調査の概要

今回展示する資料は、県営ほ場整備事業により失われる範囲の発掘調査で出土したものです。（本遺跡は、平成 10・11 年に高速道路建設に伴い、(公財)新潟県埋蔵文化財調査事業団も発掘をしています）。

市の調査により、12 世紀後半から 14 世紀（平安時代末から室町時代）にかけての集落が見つかりました。見つかった遺構は、掘立柱建物 73 棟、井戸 25 基、土坑 120 基以上などで、掘立柱建物は、重複するものが多く、何度も建替えていたと考えられます。これらの建物は主軸方向とその配置から、複数のグループに分けられます。井戸は、平面形が円形・楕円

形・方形の 3 種類があり、井戸枠は縦板と栈木・隅柱を組んだものと、縦板と曲物を組み合わせたものの 2 種類が見られます。

遺物は、かわらけ・陶磁器・土製品などがあります。かわらけは、手づくね成形とロク口成形の 2 種類が見られます。陶器には、真木山・笹神丘陵産の陶器、珠洲焼、瀬戸焼があり、珠洲焼の片口鉢（現在のすり鉢）が多いことが特徴です。磁器は、中国から輸入された青磁・白磁・青白磁で、高級品とされる青白磁の梅瓶も見つかっています。

また、調査区は地下水位が高く、多くの木製品が良い状態で残っていました。建物や井戸の部材のほか、漆器の椀、箸、杓子といった食膳具が多く見られ、容器類や祭祀具、信仰や供養に関する木簡も見つかっています。

○まとめ

本遺跡は、平安時代末から室町時代まで継続的に営まれた集落です。微高地周縁を溝で区画し、その中で生活をしていた様子が明らかとなりました。また、各地からもたらされた豊富な遺物は、当時の人々が潟湖や河川を通じ、各地と結ばれていたことを示しています。



調査区全景(南西から)



井戸枠・曲物出土の様子(東から)

いじみの 五十公野館跡

所在地：新発田市五十公野字櫓下 4859 番地 ほか

調査原因：新発田市立東小学校建設事業

調査期間：平成 27 年 7 月 2 日～11 月 27 日

調査面積：2,535㎡



遺跡遠景（北西から）

○遺跡の概要

五十公野館跡は、五十公野丘陵の西側のふもと（舌状台地）に位置し、現在は市立東小学校（旧五十公野小学校）の敷地となっています。その背後には、天正 15（1587）年、上杉景勝に攻め落とされた五十公野城（新発田氏の支族、五十公野氏の居城）が立地します。「殿様の屋敷」があったとの伝承から、当館跡は五十公野城に関連すると言われてきました。

○発掘調査の概要

今回の調査は小学校の建替えに先立つもので、工事で失われる範囲を発掘調査しました。ただし、旧校舎の基礎などで壊された部分も多く、遺跡の残りは良くありませんでしたが、井戸や柱穴、溝などが見つかりました。

井戸は 6 基見つかり、いずれも深さが 3 m 以上ありました。深くまで掘らないと、水を確保するのが難しかったようです。井戸の底（水溜）には、曲物や桶が設置されていました。また、明確な建物跡は見つかりませんが、柱穴がいくつも見つかることから、掘立柱建物が建てられていたと考えられます。なお、当館跡からは土塁や堀は見つかりません。調査で見つかった陶磁器・土器には、中国製

の青磁・白磁・青花^{せいか}、国内産の瀬戸美濃焼、珠洲焼、越前焼、かわらけなどがあります。これらの年代は 13 世紀から 16 世紀（鎌倉時代から安土・桃山時代）と考えられ、特に 15・16 世紀（室町時代から安土・桃山時代）のものが多いです。また、刀や鏃（矢の先）、鉄鍋などの金属製品も見つかり、特に青銅製の観音立像（高さ 7.46cm）は注目されます。これは、阿賀野市華報寺墓跡^{けほうじ}から見つかった観音立像と同形です。両者の成分分析を行った結果、銅・錫・鉛^{すず なまり}の割合が大きく違っていました。平成 31 年に、当館跡の観音立像は市の有形文化財（歴史資料）に指定されました。

○まとめ

今回の発掘調査によって、本遺跡は主に室町時代から安土・桃山時代の遺跡とわかりました。遺跡の残りが悪く、見つかった遺構は多くありませんでしたが、五十公野城に隣接することから、五十公野城の根小屋（山麓の屋敷）または城の一部（副郭）の可能性が考えられます。また、見つかった陶磁器や石臼、砥石には明らかに火を受けた痕跡が認められました。このことは、五十公野城落城との関係がうかがわれます。



調査区全景（西から）



珠洲焼大甕出土の様子（北から）

いた やま 板山館跡

所在地：新発田市板山字館ノ越 2279 番地 1 ほか

調査原因：県営ほ場整備事業 加治川右岸地区

調査期間：平成 25 年 5 月 29 日～12 月 25 日

調査面積：1,878㎡



遺跡遠景（南東から）

○遺跡の概要

板山館跡は、加治川が作った段丘上にある丘陵麓の、緩い傾斜地に立地しています。遺跡の周辺には田畑が広がり、丘陵の麓から湧出する水はこれらの田畑に使用されています。今回の調査で、館は丘陵麓を流れていた川を利用して築かれたとわかりました。当時も、この川が周辺の田畑を潤していたと想像されます。

○発掘調査の概要

調査は、県営ほ場整備事業に先立つものでした。工事で失われる範囲の発掘調査を行い、郭内の西側部分と南半分ほどを調査しました。

調査の結果、遺跡は中世に築かれた居館が近世にも屋敷地に使われていたとわかりました。館（屋敷）が存続した期間は、出土した遺物から、14 世紀後半から 18 世紀前半（室町時代から江戸時代中期）までと考えられます。

遺構は、館の北・西・南の三方を囲む推定規模 50～60 m の堀と、館の東を流れる川 1 筋が見つかりましたが、土塁は残っていませんでした。郭内には掘立柱建物 37 棟、竪穴建物 1 棟、柵列 3 列、井戸 3 基、土坑 57 基、溝 31 条、杭列 1 列などがありました。建物は複数が重複し、何度も立替えられたことがわか

りました。先後関係などから、11 期に渡り建替えられていたことが判明しています。

遺物は、近隣で焼かれたかわらけや瓦質土器と、珠洲焼・信楽焼・越前焼・瀬戸美濃焼・肥前系陶磁器といった国内各地の陶磁器、青磁・白磁・青花などの中国製の陶磁器、茶臼・粉引臼などの石製品、漆器・下駄・建物の柱材などの木製品などがあります。陶磁器の組み合わせ、特にすり鉢などの調理具や壺や甕などの貯蔵具は、主に使用されていた陶器の産地が年代ごとに異なり、江戸時代になると碗・皿類も含めほぼ肥前系陶磁器で占められます。当時の陶磁器生産・流通の状況を反映する組み合わせで変遷した様子がわかります。

○まとめ

今回の調査により、本遺跡は室町時代に築かれた方半町規模（約 50 m）の館が、江戸時代中期まで有力者の屋敷として利用されていたとわかりました。館は、川を堀の一部として利用し築いていたことも判明しました。館の場所が、丘陵部から平野部へと水が流れ出る入口に当たることから、当時の有力者がこの場所を選び、館を築いて利用し続けたと考えられます。



調査区全景（南から）

令和元年度 新発田市遺跡出土品展

新 発 田 の 中 世 遺 跡

—近年の発掘調査成果から—

編集・発行：新発田市教育委員会 文化行政課

発行日：令和 2 年 2 月 28 日